英知大学同窓会会報

Alma Mater SAPIENTIA

UNIVERSITAS CATHOLICA OSAKENSIS SAPIENTIA
SAPIENTIA ET FORTITUDO

Vol.16
Oct.15.2001

発　　行：英知大学同窓会
〒661-8530
兵庫県尼崎市若王寺2-18-1
発行責任者：野　村　　裕
編　　集：英知大学同窓会

●真の大学発展を願って・・・・・・・・・1
●関東支部だより・・・・・・・・・・・・1
●今の学生と関わって・・・・・・・・・・2
●英知大学、公開討論会・・・・・・・・・2
●計報・・・・・・・・・・・・・・・・・2
●追悼ミサのお知らせ・・・・・・・・・・2
●教職員へのアンケート・・・・・・・・・3
●今日の大学生への就職支援のあり方・・4
●ローラスと英知・・・・・・・・・・・・5
●QUESTION IT・・・・・・・・・・・・6,7,8

真の大学発展を願って

会長　野村　裕

今年の夏は、例年に無く猛暑の日々が続き、秋に入ってもまだ暑い日が続いておりますが、会員、準会員の皆様にはお変わり無く、お元気でご活躍のことと思います。世情では、IT産業の不況、株価の暴落、デフレスパイラルにより経済不況に陥っており、先日も悲しいテロ事件、殺人事件、子供への虐待等全世界が大きく揺れ動いております。そんな厳しい社会情勢の中、役員一同、仕事を持ちながら月一回の役員会をこなし努力しているつもりであります。

同窓会活動は言うまでもなく、「会員相互の親睦、大学の発展」の為の活動であります。我々、役員を引き継ぎ数期やらせていただいている年月で、会員及び大学当局からの批評といいますか、明確な反応が伝わってきません。我々もボランティア活動での同窓会運営であり、我々の活動が皆様にどのように受け止められているのか、又評価されているのかが分りづらい中での活動内容であり、将来展望でもあります。

日々、「これでいいのか」と自問自答しながらの活動状況であります。そのひとつの試みとして、今回、大学当局に許可を求めず、独自判断で現教職員全員の方に送付形式でアンケート調査をご依頼し、ご回答をいただきました。結果を見ていただければ分りますが、回答者(回収者)が極端に少なくいかに無関心、非協力的であるかという事です。

我々が、大学の発展を願い、開かれた大学を求めているにも拘わらずこの現状であります。ご協力をいただいた方々には感謝いたしますが、少数回答での考察はしにくく、客観的判断にはなり難いですが、一つの評価として見ていただければ幸いです。

各々の方々からご意見をいただきましたが、非常に悲しかったことは、我々まじめに取組んできたつもりが、誹謗中傷的な意見があり心悲しい事であります。また、評論家的ご意見が多く、共に大学発展に努力しようとする気概に欠けているように感じました。

主体的に活動するのは我々会員ではありますが、大学運営及び卒業生を送り続けるのは、教職員の方々ではないのでしょうか。これは、大学運営が個別個人主義になり、全体的組織運営がなされていないのではないかと、ある方は「大学の危機」ともおっしゃっておられます。

この現状を我々は特に意識を持ち、評論家にならず、自ら主体的に問題に取り組む姿勢が非常に必要な時代、時期になったものと考えます。この状況を打破する為に、卒業生、在校生、教職員の方々と共に「真の大学発展」を問い、行動を起そうではありませんか。

関東支部便り

あの忌まわしい同時多発テロは一生記憶に残るでしょう。

私にとってはミステリー小説の世界でしかなかった事が、現実に起きてしまったテレビ中継を見ていながらでも、あたかも映画を見ているような錯覚に陥ってしまうと言えば分って頂けるでしょうか？思い起こせば、米原潜のえひめ丸への衝突といい、長距離哨戒機（AWACS）と、中国軍機との接触事故といい冷戦時代の米軍では考えられないようなヘマをやらかした現在のアメリカなのでテロに対しても警戒が足りなかったのか、或いは他に理由があったのか、いずれにしても精神的な事はもちろんの事、世界経済に与えた打撃は余りにも大きく、消費の回復を望んでいた多くの人間の希望を断ち切ってしまったというところでしょうか。

さて我々関東支部は二〇〇一年の行事を終了したところです。今年を振り返ってみますと毎年同じ壁にぶつかっている事を思い知らされます。この前も反省会を開いた時に問題になったのは会員の集まりが思うに任せず参加していただいた方を失望させたのではないかという事です。

こじんまりして和気藹々と会話は弾みますが少し寂しい。色々工夫はしているのですが結果は厳しいですね。

来年は役員の若返りをしましたので心機一転支部会員に喜んで頂けるイベントを企画していきたいと考えて居りますので皆様のご協力、よろしくお願いいたします。

最後になりましたが英知の同窓生の神田ロムさんがニューヨークで俳優の修行をしているのですがテロがあった時の事をEーメールで知らせてくれたので、ニュースでは見られない生々しさが伝わって来ますので、是非ご一読ください。

'78仏文卒　永森　孝夫

「今の学生と関わって」

'92英文卒　前中　正彦

私は、一九九九年四月から本学の就職課で働いています。この二年半学生との関わりの中で感じたことをシェアーしたいと思います。

私が関わる仕事は、三・四回生が中心です。当然仕事柄、進路・就職という話になります。その中で、今企業は「あなたは、この会社（社会）で何ができますか」「あなたは、この会社（社会）で何をしたいですか」という質問を必ずします。さて、読者のみなさんの中でどれほど多くの方が明確に文章や話で表現することができるでしょうか。

今大学生の多くが「何がしたいんだろう」「何のために就職するのだろ」という問いに試行錯誤しています。それが故に、足も鈍り、顔の表情も曇ったまま就職活動をする者、考えることを放棄する者、今本学に限らずご周知の通り社会問題にまで発展してきています。

自分自身と向き合うことの少ない多くの学生は、社会を見渡したとき、リストラ、仕事に疲れ切ったビジネスマン、身近な人達の生きざま、社会慣習などあまりにも夢や希望がない世の中に自分がどうこれから生きていったらいいのか戸惑っています。そんな中、日々の生活に追われ、不安な日々に駆られ、まわりのプレッシャーとの葛藤、まるで出口のない迷路に迷いこんだかのように時間だけが過ぎていく・・・何の目的も見つからないままに・・・。彼らは、変わりたい、変わるきっかけを、まるで青い鳥を探し続けるかのように誰かや何かに求めています。「誰かが私を幸せにしてくれる」「仕事が私を幸せにしてくれる」「お金が私を幸せにしてくれる」と思うように・・・。

私は、学生と深く関わっていくと、この問題は学生だけの問題ではないという結論に達します。誰かや社会が悪いのではなく、一人ひとりがどう生きるかということを、私たち一人ひとりが真剣に考え、自分を直視することの大切さを彼らから気づかされます。社会にどう適用するかではなく、どう社会で自分の持ち味を自分らしさを活かして生きていくか、これから私と彼らとの課題であり楽しみでもあります。

英知大学・公開討論会

米国同時多発テロ問題の核心を探る　憎悪の連鎖を断ち、真の平和を

日時　十一月三日（土）
午前十時から十二時半

場所　英知大学サピエンチア
タワー十階大ホール

パネリスト

イスラーム宗教思想について
松本耿郎
英知大学国際文化学科長

パレスチナ問題について
和田幹男
英知大学副学長宗教文化専攻主任

日本人キリスト者として
松浦悟郎
日本カトリック正義と平和協議会会長

特別スピーカー

アメリカ人として
山根キャサリン
英知大学国際言語教育センター長

趣　旨

九月十一日、米国で起こった同時多発テロは、世界中に大きな衝撃と悲しみ、そして憎しみを引き起こしました。原因はまったく違うとしても、多くの犠牲者を出した阪神淡路大震災体験者として、突然の暴力事件によって尊いいのちを落とされた方々の死を心から悼み、かけがえのない家族や友人をなくされた方々や家を失った方々の悲しみに共感し、苦しみを共有していきたいと念じています。そのためにまず、事件当時、米国におられたニューヨーク生まれのアメリカ人女性の声に耳を傾け、黙祷を捧げます。

今回の事件の核心に触れるためには、イスラーム宗教思想や中東文化に対する正しい理解が不可欠です。そこで、パレスチナ問題の歴史を概観し、イスラームの理解を深め、真の平和を構築していく具体的な取り組みの可能性を提示します。

その上で、ご参集くださった皆さまとともに、「今」すべきことは何かを探求していきたいと考えております。一人でも多くの方々にご参加いただけることを願っております。

参加費　無料

主　催　英知大学および第三八回英知祭実行委員会

訃　報

ヨセフ・フィナティ神父（聖コロンバン会・千葉県東金教会主任）は、五月十四日、心臓発作のため帰天した。七十八歳。

故人は、七三年から英知大学で英語の教鞭をとり、笠田、三国、平野の各教会で司牧活動に励んだ。

＊　＊

ジャン・メルオー神父（パリ外国宣教会）は、五月十七日、静養先であるフランスの同会施設モンベトンで急性心不全のため帰天した。七十五歳。師は日本と日本の教会をこよなく愛した。

故人は、一九四九年十一月大阪教区へ派遣され、五一年から八年間旧灘教会初代主任、五六年から南山大学、大阪信愛女子学院短大、神戸海星女子学院大学、京都ノートルダム大学、聖母女学院高校（大阪）で講師を歴任。六三年から英知大学教授、その他数多くの音楽活動（オルガン、オーケストラ、作曲、コーラス）をおこなった。八六年から尼崎教会主任。九一年から九五年まで宝塚教会主任。九六年静養のため帰国。九七年再来日後、ガラシア病院他各所で静養したが、思わしくなく、九八年離日、モンベトンで静養。

追悼ミサのお知らせ

「錦ちゃん」こと、故松本錦治神父様の12周年の追悼ミサを下記の通り行います。多数のご参加をお願いします。

日時　二〇〇二年一月二十六日（土）
午後二時より

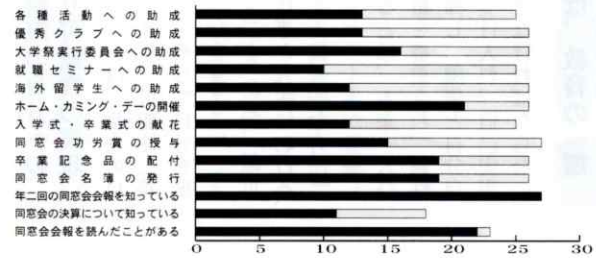
場所　英知大学チャペル
※ミサ後、サピエンチア
タワー八階にて茶話会

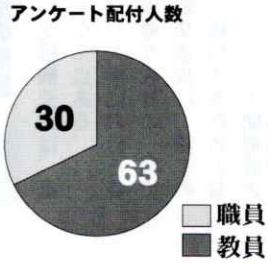
「錦ちゃん」について…松本錦治神父様は、六七年から七二年まで英知大学に勤務され、学生課長、教務課長、学生部長を歴任。その間に腎臓病を発病、九〇年一月二十八日帰天。英知大学では、「綿ちゃん」のニックネームで多くの学生に親しまれました。

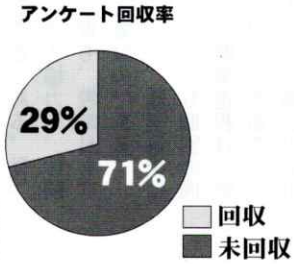
錦ちゃんの追悼ミサ世話人卒業生有志
連絡先　大石真弓
（〇六・六七六三・三五四四）

教職員へのアンケート

2001年9月に英知大学教職員に同窓会活動に関してのアンケート調査を実施致しました。
アンケート送付人数は93名、アンケート回収枚数は27通（27名）、29%の回収率でした。







アンケートの結果

◇活動の認知度

英知大学教職員の同窓会に関しての関心度に関してはアンケートの回収結果からしますと非常に低いものと推察できます。反省として、活動内容が当局教職員に対し、十分にアナウンスができていなかった事も原因の一つと思われます。

◇活動個々に関しての結果

今回の回答率からはっきりとした結果は出すことが困難。（回答率が非常に低いため）。

あえて考察するならば、同窓会の最大イベント『ホームカミングデー』の開催に関しては認知度が高く、今後、同窓会と大学の橋渡し的役割の大きなイベントとしての育成も視野に入れ、教職員の参加を促進する可能性も検討すべき課題になると思われます。

◇学生への援助活動

同窓会は、現在、多くの助成活動を行っていますが、準会員である学生達への助成に対しての認知度が低い結果となっています。大学の繁栄を願う我々卒業生の施策としての助成金に関してどのように今後執り行なっていくかが課題と思われます。

◇総括

今回初めて、大学教職員に対し同窓会活動に対するアンケートを行いましたが、回収率が低く残念な結果となりました。教職員に対して同窓会の活動を認知していただき、活動への協力を得ることは困難で、今後の課題の一つに考えられます。また、各種の援助活動である助成金の認知度の低さにも認識を新たにしなければなりません。会員の方々からの大切な資金を運営するにあたりより認知度を上げることが必要です。

今後も続けてこのようなアンケートを行ない大学との連携を深めて行くようまた、同窓会への理解を求めることが課題となりました。

◇その他の意見・助言等

●飲み食いばかりに金を使わない。でたらめ会計はガラス張りにすること。現役員は退任せよ。

●入試課と協力して受験生が多くなるような働きを望みます。就職課と協力して就職先の情報を提供してもらいたい。

●卒業年次毎の同窓会役員を決め、連絡や集まりの為に備える。

●同窓会グッズを考えてみては。

●同窓会のホームページのセンスをもっと良くし、多くの人の声が反映されるように。

●同窓会の人は今、英知大学の大変な危機に大きな働きをするチャンスです。

●同窓会のメンバーに連絡をとるということは大変なこと だと思います。そのためには「会報」を充実させ、「会報」を通じて、というのが有効な手段だと思います。頑張ってください！

●頑張ってください。協力したいと思います。

●会員数のさらなる拡大、英知大学の改革への提言、大学の募集に一層の協力、企業の見学経験を大学の経営管理に活かすこと、可能ならば経済的支援をしていただくこと。

●お忙しい中、ご活躍、誠に感謝しております。同窓会の役割存在はとても重要です。一つのコミティとして、同窓会という絆は計り知れないものがあると思います。何が出来るかと言われると、明確な答えはありませんが、一つはやり続けることが何よりも大切だと思います。年二回の会報を楽しみにしていらっしゃる方がいます。勇気づけられると聞いたことがあります。感想というか当たり前のことになってしまいましたがお身体あっての同窓会ですので、ご慈愛ください。

●同窓会のホームページを早く本学のものとリンク出来ればいいと思っています。

●本学の入学者数、受験者数が年々減少しています。卒業生の方々ご子息、ご息女、ご親戚の方、お知り合いの方に、本学の受験をお勧めいただけたら幸いです。

●よくやってくださっていると感謝しています。在学生の方に同窓会の活動をアピールされたほうが関心が高まるのではないでしょうか。

●Good luck all your activities to this society. And may God bless you richly.

●ＨＣＤの名前は知っていますが、その内実はどうなっているのでしょうか。私の出身大学では①子連れで参加出来るようにａベビーシッターあり、ｂ子供たち（幼児）のプレイングループと学生ボランティアあり、ｃ小学生対象「学内オリエンテーリング」が用意されていること、②銀祝銅祝式があり、それぞれのパーティがあると、同級生委員からお知らせがあります。

（ＨＣＤ実行委員は卒業年二十五年目と一五年目が担当することになっている。）

●同窓会員の子弟が英知大学に親しみ、「大学に行くならお父さん、お母さんの出身校、英知」と言えるように頑張ってください。

●現在の留学のための奨学金は停止しているように伺っています。新入生の諸会費から同窓会費の項目が無くなってしまったからだと聞いていますが、在学生からの同窓会費にそれほど依存していたということでしょうか？　諸会費から同窓会費が外れたことによって、留学生の助成が取りやめられるということは、これまで一部の留学する学生のために、ほかの留学しない学生からも徴収された会費が賄われていたということにも解釈できるのですが。

●職員にアンケートをとる場合、大学のポストを利用してはどうか。貴重な財源をこのように使うのはいかがなものか。折角、事務室があるのだから。

●同窓会の積極的な活動なくして、大学の発展はあり得ません。卒業年ごと、あるいは地域を単位にした土台づくり（支部づくり）をしっかりやり、もっと活発な活動を行われるよう望みます。

●卒業留学生のネットワークを作りあげるとよいと思います。

★今日の大学生への就職支援のあり方

就職課長　須澤　晃

就職は、将来の自分への投資であり可能性の実現

『就職する』とは、将来の自分への投資であり、可能性と夢の実現である。そして自分を振り返り、『自分を変える』ことのできる機会でもある。最近『（副題）仕事と人生における、変化に対応する驚異的な方法』というベストセラー本が登場した。就職するとは、本来一人ひとり違う人格を尊重され、適性と能力を発揮し、環境と自分自身の変化を受け入れ、自己実現できるものでなければならない。

就職支援は、教育の一環であり個別の問題

就職活動の支援構造には、重要なポイントが二点ある。

その第一は、大学における就職支援は、重要な教育の一環であること。職業選択は、将来の社会を形成し維持するための若者を育てるという、人間形成の原点に関わることである。従って、家庭における協力も、体験をふまえた学習も、教職員あげての教育も必要なのである。

そして第二には、職業選択に関しては、一人ひとり個別の問題であること。職業選択は、画一的な支援で対応できることではなく、さまざまな機会の活用と個別の対応が必要である。ましてや、新卒一括採用などが全ての機会ではない。それは、個人の自立と個性の発揮によって、初めて仕事のやりがいと人生の生きがいが産み出されるからである。したがって、環境の多様化にいかに対応するか、個別の問題にいかに対応するかが就職支援に関する中心的課題となる。

さらに問題としたいのは、就職活動が『一斉に一律一括なもの』と定着したことを重視したい。四月一日付けで一斉に採用し、人事部が一括して採用、給与待遇の一律採用がおこなわれている。さらには、採用基準として学業の成果を問うのではなく、大学格差を問う傾向は変わらない。

学生は、一人ひとり違う人格と個性を持ち、違う人生を歩むのであるから、職業選択の方法も、就職先も仕事の内容も違っていて当然なのである。その上での就職支援のあり方でなければならない。その意味では、就職情報産業は、画一的な就職活動の方法論を普及させ過ぎた観がある。

もし、大学で何をしたかを問うのではなく、どこの大学を出たかだけを問うような偏差値教育の延長のような採用が続き、それに迎合する就職活動支援を続けるならば、短期離職者も減らず、不就業者が減らない。

今こそ、真のキャリアとは何なのかが問われている。大学には、社会に役立つ社会人を送りだす役割と使命が求められるかぎり、大学ごとに様々な事情があるにせよ、就職担当の役割は重要で、その如何によっては一人の人間の貴重な人生を左右することになる。

大学は、教育という名のサービス事業である

さて、大学は、かつての象牙の塔を大学院へその座を譲り、今や社会に役に立つ人間を教育する舞台となっている。そこには、教員職員あげての取り組みが必要である。入試制度においても、教学の内容においても、就職支援の仕組みにおいても、サービス産業としての心得が基本でなければならない。つまり、顧客としての学生の、顧客の第一教育者としての保護者（父母）の満足度が重要な評価の鍵である。

就職担当業務は、大学の出口として位置づけることではなく、将来の日本と世界を背負う人材の「社会への入口」を担当する業務である。社会人となるために一度限りの命がけの選択ではなく、一人ひとりが考え感じ悩み決断し時には挫折もし再び立ち上がり、そのようなリターンマッチの勇気づけと動機づけをすることが、就職担当の最も重要な仕事である。

したがって、その資質は一層高度で人間的であることが求められる。最終的には、人の心が分る対応が求められる。ハートとマインドを大切に学生たちと日々接することを心掛けたい。

学内での会社説明会

模擬面接風景

ローラス　と英知

実り多いパートナーシップ

国際言語教育センター所長
教授　山根キャサリン

昨春、岸学長は、アイオワ州にある本学の姉妹校ローラス大学を訪れ、両カトリック大学間で国際理解促進にむけての協調を再確認したが、それを受けて、この春、英知大学では、日本語と日本文化について二週間のプログラムを組み、初めてローラス大学より研修生を迎えた。研修生たちは、学内において豊富な教材を用いて日本語を楽しく学習するかたわら、英知大学教員が様々な側面から日本文化を論じた講義を聴講した。

岸英司学長は「日本文化の心」を論じ、スティーブン・ライアン教授は「日本での暮らし、その神話と実際」の題で講義を行い、三浦太郎教授は、フリーターへのインタビューをまじえて「現代日本の若者世代」について語った。岡田彰子教授は、研修生たちを俳諧の世界へと誘い、彼らに、英語でそれぞれの作品をつくる機会を与えたし、アンドレア・ボナッツィ教授は、儒教哲学の入門講義を行い、最後に、今道友信教授が日本哲学について語った。

アメリカ人学生と彼らを引率して来日されたトーマス・ジュエルヴィターリ教授はじめ、だれもがこうした有意義かつ多岐にわたるプログラムの選定に称賛を惜しまなかった。

一方、学外においても、体験学習が続けられた。アメリカ人学生たちは、英知の卒業生前川貴子さんの巧みな指導によって、書道や茶道、生花を学ぶ好機を得、また本学教員有志の案内で、大阪、奈良と六甲山を散策した。今回の研修旅行のハイライトは、京都東福寺の管長、福島慶道氏による禅についての講義であった。国際言語教育センターにおいても、ローラス大学生と英知大学生との親交を深めるべく、いくつかの催しを企画した。アメリカ人学生は、二週間の滞在中、日本の家庭にホームステイ、六家庭の内五軒までが英知の卒業生家庭であった。

アメリカ人学生たちの得難い日本体験を可能にした宮脇由紀子さん、橋本めぐみさん、佐藤洋子さん、小林立美ご夫妻、並びにこれらの方々のご家族に感謝します。それぞれの家庭と心を開いてくださったことで、本学の年若い訪問者たちは初めての日本体験という大きなチャンスを与えられたのであった。

二〇〇三年五月には第二回目の受け入れを行いたいと考え、ホストファミリーを再び募っている。YOROSHIIKU！

九月三日から十四日にかけて、今度は英知の学生がローラス大学へ研修で訪れ、春に日本で出会った仲間との再会を喜んだ。

ミシシッピー川の遊覧と地域の小学校を訪問して日本を紹介できたことが、心躍る今回の二大イベントであった。また講義には、アメリカ音楽と社会的広がりといったような興味深いテーマもあり、学生たちはアメリカ先住民の文化について学ぶことに特に関心を示し、最近ローラス大学で行われた本物のアメリカ先住民族長による講演ビデオを見たあと、数多くの質問を行っていた。あっという間の、楽しい二週間であった。そして別れの時がきたときには、だれの目も涙でくもっていたのであった。

そのほか、本学英文学科卒業生、小川公美さんが現在ローラス大学で初級と中級の日本語クラスを担当しており、好評を博している。また最近、ローラスより十五代目の英語助手コナー・マーフィーを、アンジェより五代目のフランス語助手エミリーポミエを迎えた。コナーとエミリーは英知大生に会話クラスを提供すると同時に、アメリカやフランスの文化について楽しく教えてくれる事と思う。本年、英知は国際理解に向けて大きく踏み出したのである。

国際言語教育センターでは、語学力を磨きたい英知大学卒業生を対象に、ネイティブスピーカーの助手による英語、フランス語、スペイン語の会話クラス開講の可能性を探っている。

受講料をはじめ詳細については未定であるが、春には開講したいと願っている。受講を希望する卒業生は、氏名と連絡先、受講を希望する言語を、FAXまたはEメールで申し出てください。

FAX
（〇六・六四九一・五四三三）
E-メール
（silec@sapientia.ac.jp）

書道などを学んだ研修生達と先生方

ローラス大学でベースボールを行った
研修生とローラスの学生達

QUESTION IT
QUESTION IT
QUESTION IT

英語英文学科教授
井田　規文

ＩＴ（アイ・ティー）という言葉が出回って、ずいぶん久しくなります。私には今なお、ＩＴ（イット）の感が拭い切れません。元来が懐疑的にならざるを得ない、また、そうであることが善しとされる仕事上の癖のようなものですから、ご勘弁下さい。

いきなり脱線染みた話をします。シェイクスピアの『ハムレット』は、世界中で最も有名な芝居の一つですから、どなたもご存知でしょう。その冒頭の場面は、デンマークの北東部にあるエルシノア城の胸壁です。そこに近頃毎夜午前一時にきまって亡霊が現れるというのです。そこでハムレットの親友であるホレーシオが夜警番のバーナードとマーセラスに案内されて来ると、一時を告げる鐘の音と共に、予測した通りに、'this thing', 'the apparition' が現れ出ます。その亡霊のことを、二人とも「it」という、得体の知れない物に対して使う言葉で言い表す。ちょっと野暮ったいですが、引用をお許し下さい。翻訳は小田島雄志訳を使います。

Marcellus: Peace, break thee off; look, where it comes again!
Bernardo: In the same figure, like the king that's dead.
Marcellus: Thou art a scholar; speak to it, Horatio.
Bernardo: Looks it not like the king? mark it, Horatio.
Horatio: Most like: it harrows me with fear and wonder.
Bernardo: It would be spoke to.
Marcellus : Question it, Horatio.
(I. i. 43–48)

マーセラス・シーッ、静かに。見ろ、出たぞ。
バーナード・亡くなった王そのままの姿だ。
マーセラス・学者ならどう話しかければいいかわかるだろう。
バーナード・先王そっくりではないか、ホレーシオ。
ホレーシオ・たしかに似ている。恐ろしくも不思議なことだ。
バーナード・話かけてほしいようだ。
マーセラス・話してみろ、ホレーシオ。

私にはこの最後の、マーセラスがバーナードに間髪を入れずにホレーシオに言った、"Question it"を、今日のＩＴ革命云々に託けてみたくなります。もちろん、原文の意味は、亡霊である「it」に問いかけをしろ、と言っているのですが、私はここでは、ＩＴを問え、としたいのです。正体が判らない物には先ず疑ってかかる姿勢が必要ではないでしょうか。と、言いましても、何もＩＴすなわちInformationTechnology（情報通信技術）とは何かを問えと言うのではありません。もちろん、それはそれでとても大切な事です。ＩＴはわれわれの生活にいつの間にか入り込んできて、現にもうすでに、その便利さゆえに、われわれは何の問いかけもなくＩＴを享受しているのではないでしょうか。

ＩＴの実体を完全に理解できる人は殆どいないと言っていいでしょう。ＩＴを仕掛けている人たちですら分らないことがいっぱいある筈です。例えば、長所もさることながら、短所、あるいは弊害を予測することは完全にはできません。また、いかなる規模の罪悪・犯罪が潜んでいるか把握することは出来ないでしょう。そこにこそ実は人間であればこそ生じる問題があるのです。

閑話休題、人間か機械、機械か人間かの話になれば、当然、人間が先に来なければならないことは、誰しも疑いを挟みません。人間が機械を作るのですから、当たり前と言えば当たり前のことです。ですが、コンピューター技術が長足に発展を遂げ、今や人間には不可能なことをほとんど機械が出来る時代です。

十五世紀半ばのグーテンベルクの印刷機発明に始まったと言ってもいい、人間の仕事における大量生産と時間短縮の概念、一七六〇年代のイギリスに起こった産業革命によって、人間は機械動力で行動範囲を、文字通り、洋の東西を問わず、いよいよ二十一世紀の舞台は宇宙へと広がりをみせています。

このように見てきますと、人間の営みは人間の身体的限界への挑戦・拡大の試みの成果の積み重ねと言えます。そして、その便利さとスピーディーさの追求に技術が開発され、益々その便利さに浸り、楽を覚えてしまったようです。ですから、今さら不便な昔に戻れと言われても、いったん高速道路に入った車は急に速度を落とすと、高速で走る他の車の邪魔になり危険であるのと同じように、一度ＩＴの流れに入ってしまうとそれに乗っかっていないとそれこそストレスが溜まって、自律神経に支障を来す羽目になりかねません。これもまた人間なればこその、つまり人間の弱点が露呈される問題です。

「ハード」的には（道具としての）コンピューターによって、また「ソフト」的には（思考の志向として）インフォメーションと言う名の下に、現代の社会がスピードと便利さを金科玉条のごとく第一に考える社会構造を備えつつある状況において人間は何処に向かって行くのでしょうか。どうしても、ハムレットの人口に膾炙された感を否めませんが、例の有名な独白の科白を小田島雄志訳で想い出してしまいます。（話はさらにいっそう脱線しそうですが、お付き合いください。）

Hamlet : To be, or not to be: that is the question:
Whether 'tis nobler in the mind to suffer
The slings and arrows of outrageous fortune,
Or to take arms against a sea of troubles
And by opposing end them.
... (III. i. 56–60)

ハムレット：このままでいいのか、いけないのか。それが問題だ。どちらがりっぱな生きかたか、このまま心のうちに暴虐な運命の矢弾をじっと耐えしのぶことか、それとも寄せくる怒濤の苦難に敢然と立ちむかい、闘ってそれに終止符をうつことか・・・

シェイクスピアの偉大さを今更褒め称えようと言うのではありません。が、それにしても『ハムレット』が書かれたのが一六〇一年（ハロルド・ジェン

キンズ編集のアーデン・シェイクスピア版）だとしますと、今年でちょうど四〇〇年になりますが、『ハムレット』の普遍性を感嘆せざるをえません。我田引水の謗りを承知の覚悟で、'fortune'（運命）を'IT age'（IT の時代）と置き換え、そして'troubles'を現代的に広義に解釈して「苦難」の他に「災難」「不幸」「心配事」「面倒ごと」と捉えて、ほんの少しパロッてみますと、どうでしょう。実に現在のＩＴ時代に、逡巡する人間の内的状況を映し出している、と言えるではありませんか。それよりもさらに、注目したいのは、"To be, or not to be"を「このままでいいのか、いけないのか。」と訳出した小田島訳の絶妙さです。それまでは、福田恒存訳（一九五九年）の「生か、死か、それが疑問だ」が支配的でした。一九七三年の翻訳ですが、当時としては、斬新すぎるほどの訳し方で、正直驚きました。その驚きは今もハムレットの内面の決断しにくい状況にある葛藤状態をまことにうまく日本語で表現されていることもそうですが、現代のＩＴ時代を生きる私たちの状況に当て嵌まるくらいに普遍性があることについても言えます。

では逡巡するあるいは困惑・混迷する現代人はどのように'outrageous'なＩＴ時代を生きればよいのでしょう。ＩＴという得体の知れないものに対して取るべき態度は、得体の知れないものは得体の知れないものとそのままにして「このまま心のうちに・・・じっと耐えしのぶ」よりは、やはり、敢然と立ちむかい、"question it"する姿勢のほうが、「闘ってそれに終止符をうつこと」まではしなくても、ハムレットが「it」の正体を突き止めたように、何らかの答えは得られる筈です。それには、今の自分に対して「このままでいいのか、いけないのか」を問い続ける事がいいのではないでしょうか。

何故なら、ＩＴという文明の利器は人間にとって便利であるがゆえにどうしてもその便利さを優先させる考え方を当たり前のこととしてしまいがちになりますから。そうなると、勢い自分中心的な考え方にいつの間にか疑問すら持たなくなってしまうようです。

ごく身近な例を見てみましょう。電車の中でいつも目にする光景は携帯電話を手にしている人の数の多さです。呼び出しのチャイムやらメロディがあちこちから聞こえ、そして話し声が否応無しに耳に入ってくる。車掌が携帯電話は周りの人たちに迷惑になるから遠慮するように車内アナウンスで呼びかけているその最中ですら、なんの躊躇も恥じらいもまた周囲の人たちに対する思いやりも見せずに、電話に夢中になっています。

先日、阪急電車の甲陽線で夙川駅に電車が到着した時に、定年を過ぎて、時間にゆとりがあるように見受けられる老人男性が、あなたの携帯電話は迷惑だ、と、電車に乗っている間ずーっと電話していた、ある中年婦人に向かって、諫め出しました。するとその婦人も負けずに、自分はどうしても連絡を取る必要があったから、やむを得ず、電話をしていたのだと、悪気があってやったことではないと、そのように注意を受けるのは心外だと言わんばかりの口調で切り返すさまは、たまたまその場に居合わせた傍観者としても、その女性の醜さを感じて、"O most pernicious woman!"（「ああ、なんという非道な女！」）（I. v. 105）と言ったかどうかは問わないでください。

このような便利さから起こる人間の身勝手な事故や事件はＩＴの社会では日常茶飯事のごとくに起こっています。コンピューターを過信するあまり、周囲の人々に注意が払われなくなってしまうのです。

ハワイ、オワフ島沖で起こった米原子力潜水艦「グリーンビル」が愛媛県の漁業実習船「えひめ丸」を衝突転覆させたのも、ひいては人間のコンピューターへの盲目的な過信によるものと言えます。緊急に浮上しなければならない理由など何もないのに（あったとすれば招待乗船させていた民間人を喜ばせるためか）それでも急浮上するにはどのような注意が払われねばならないか、機械を操作する者は少なくともそのための基本手順を踏まなければがいけないはずなのに、全く周囲の状況を確認することすらも怠ってしまった。原子力潜水艦が民間船舶の航行領域に突如何の前触れもなく浮上すること自体の危険性の認識が欠如していたために、まさかこのような所に船がいたなんて思いもよらなかった、では取り返しのつかない、最悪の人為的過失事故になってしまったのです。

せっかくＩＴを発展させて高度な文明の利器を発明開発しても、それを操作する人間に問題があるのではいつまでたっても人為事故はなくならない。むしろ起こりうる事故はいっそう規模の甚大さを増す感さえします。潜水艦のソナー（海中音波探査装置）がえひめ丸激突の七〇分前に探知していているのにもかかわらず、任務の人間が無視してしまったのでは、根本的に大事な人命尊重の認識が欠落しているとしか言えません。

機械が何のためにあるのか、（ＩＴは何のためにあるのか）といった問いかけは愚問でしょうか。あまりにも基本的過ぎて、改めて問題にするほどの事ではないと見做してしまっているのではないでしょうか。本当はその問題こそ私達人間が常に問いつづけていなければならない筈なのに。大きな事件が起こらないと問題にならないのです。これが人間の弱点で、人間的といえば人間的なのでしょう。

しかし、またしてもハムレットの言葉が浮かんできます。かなり強引な引用で、これこそ我田引水とお叱りを受けるのを覚悟で借用しますと、

Hamlet: ... What is a man
If his chief good and market of his time
Be but to sleep and feed? A beast, no more.
Sure he thst made us with such large discourse,
Looking before and after, gave us not
That capability and godlike reason
To fust in us unus'd. (IV. iv. 33-39)

ハムレット：食って寝るだけに生涯のほとんどをついやすとしたら、人間とは何だ？　畜生と変わりがないではないか。人間に前後を見きわめる大きな力を授けた神は、その能力、神にも似た理性を、使わないまま、かびさせようとしてお与えになったのではあるまい。

ハムレットが父親の復讐になかなか踏み切れないでいる状態

に半ば嫌悪感を抱き、そのもっていきようのない自分自身への苛立ちを独白している場面です。これをまた例によって少し弄ってみますと、人の命を軽んじた事件を繰り返すのが人間の歴史だとしたら、人間って何なのだ？　動物と変わりがないではないか。（動物だってもっと賢いのじゃないか。）

人間が動物以下とは毛頭考えてはおりません。むしろ、私が引用したいのは、その後の三行です。ハムレットが認識していた「前後を見きわめる大きな力」「理性」はもともと人間に備わっているものなのに、技術革新の進歩にばかり意識が囚われ、前後を見る判断力を「かびさせようとして」いる、とくにＩＴが産業の基盤を構造的に支える社会の仕組みを是とする考えに押されて、理性的な判断が出来にくくなっていることです。

ハムレットの言葉にはさらにもっと大きなヒントが、というより人間が自らの存在に関わる重要な根本的理解を忘れてしまっていると思える事柄が潜んでいます。人間に備わっている物事の前後の判断力は神から与えられたものであり、それを人間は怠惰にも充分に活用することをしようとしないでいれば、どのような事が起こり得るのか分からないでいるのです。悲しいかな、これも人間の弱さを証明しています。ハムレットにはそれが充分過ぎるくらいに分かっていました。神から授かった能力（才能）、すなわち、タレントの譬え話に拠りますが、使わなければ神に対して罪を働いていることになることはハムレットには意識されていた筈です。

神から人間に授けられたのにも拘わらず、人間はそれをなくしてはいけないと思うばかりに、どう扱っていいのか分からず、ただいたずらに、持て余してしまって、結局のところは埋もれさせてしまうのです。

偉そうなことを申しております私などは、第三番目の使用人とあまり変わりがありません。タレントの少ない者に限って、決まってそれを埋もれさすというから、聖書の逆説的真理は正鵠を射てます。（ハムレットが逡巡したのも、意識の根底に、人間を創造した神への畏敬の念が働いていたと言えます。）

人為事故は決して無くならないでしょう。だからといって、このままでよいわけはありません。ですから、事故後の事実確認、事故の原因究明が必ず行われて、今後の再発防止に努めることはしているのですが、決まって挙げられる原因は「不注意に因る」「過失」が指摘されるだけに留まっているとしか思えません。むしろ不思議なのは、事故を未然に防いだ出来事からの今後の事故防止のための対策に資する報道が少ないのではないのでしょうか。

いつのまにか報道されなくなった事故について考えてみたい、あるいは問うてみたい事があります。「えひめ丸」沈没事故よりも、すこし以前に起こった日航機のニアミス事故です。この事故もＩＴが関連します。高度の技術と性能を備えた管制塔とジャンボ航空機との交信中の人為的なミスをジャンボ機の機長の判断によってあわや空中衝突という機体と機体の間隔がほんのわずか一〇メートルというまさに紙一重の危機を回避することができたのには、機長の状況判断の的確さであったと言えます。これには二つの点が指摘出来るでしょう。一つは管制塔から飛行機の便名を取り違えた指示が送られた事、二つ目はその指示に従えば衝突が免れないと、管制塔の指示を無視してジャンボ機の機長が独自の判断をした事です。これら二つの点はまた現代のＩＴ社会を象徴する二つの事柄にもなります。すなわち、コンピューターを信じながら人間のほうがパニック状態に陥った場合の恐ろしさと機械に信頼を寄せながらも最終的には人間の正確な判断力で危険を回避することができたという事実です。

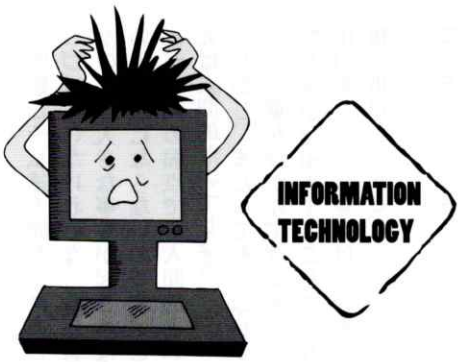
人間が作り出す文明の利器は言わば諸刃の剣です。人間には限界があり、その限界を超えて行かなければ、さらなる人間の危機を生み出すのが現代のＩＴ化社会です。ＩＴの技術が進歩すればするほど、それを操る人間の精神状態も適合して行かなければなりません。

しかし、人間の精神は機械のように常に一定を保てる保障はありません。ですから人間自らがＩＴ文明の社会で抗してゆくための有効な手立てになるのは、最後も最初も人間の問題であって、その根本は正常な「神にも似た理性」をより的確に使える態勢を取る心構えをしておくしか他に方法はないようです。こうなると私達の日常生活でのモラルとして、ＩＴの便利さを問い直し、その便利さゆえに、自分中心に陥り易いこともよく認識して、なによりも、人の命を第一に考えることは言うまでもありませんが、周りの人の立場を考えられる心の余裕をもつことを心掛けたいものです。

私の身近に自分は本当に必要な時以外は自分からは決して電話をかけないという人がいます。ＩＴの便利さに多少侵されている私などはなぜか冷たいなと感じてしまうのですが、その人は、話したい人が必ず電話に出てくれればよいが、家の人が出られた場合その人に迷惑になるから電話は受けることはあってもかけることがほとんどないといいます。ＩＴの技術からすれば、誰からの電話であるかを知らせる電話機を作ることは容易なことと考えてしまうと、もうその考え方は、ＩＴ志向が身に染み込んでしまっていると言えます。なかなか抜けきれません。と言いますより、抜けきれないのを充分認めて、事故を起こさない生活の仕方をするしかないようです。

ＩＴが「パンドラの箱」であるのかどうか。ＩＴ化をこのまま、おそらく留まることはないでしょう、推進されて行くその先に果たして「希望」が残っているのかどうか、判りようがありません。それは常に人間の為せる業だからです。ですから、私などついついスピードを出して運転しがちな不埒な者は、頑として、安全運転を心掛けるドライバーにならなければいけないのです。そうです、ＩＴを問いながら。

Frailty, my name is human being.



2001年度　英知大学同窓会　決算報告

（2000年10月1日～2001年9月30日）　（単位：円）

［収入の部］

費用	金額	摘要
前年度繰越金	6,405,015	
同窓会入会金収入	4,710,000	同窓会入会金収入
同窓会会費収入	1,662,580	終身会費及び年会費収入
名簿売上高	40,000	同窓会名簿売上高
受取利息	14,427	預金利息及び貸付金利息
雑収入	15,000	バザー売上 他
合計	12,847,022	

［支出の部］

費用	金額	実績	摘要
旅費交通費	150,000	71,958	関東支部交流 他
通信費	1,700,000	1,736,999	名簿郵送費 他
監査費	120,000	120,000	会計監査
事務用品費	100,000	131,649	消耗品
支払手数料	20,000	25,200	振込手数料 他
会議費	500,000	385,900	役員会議費
事務局維持費	1,000,000	1,000,694	アルバイト代 他
印刷費	2,500,000	1,914,289	会報年2回・名簿追補版・案内状委任状他
OBクラブ開催費	1,200,000	1,438,681	ホームカミングデー及び総会
助成金	500,000	182,481	助成金
会費に関するシステム作成費	4,000,000	150,000	名簿調査
献花費及び記念品費	300,000	51,962	卒業記念品代 他
配布金	350,000	300,000	関東支部運営費
雑費	100,000	33,344	写真代 他
予備費	6,415,015		次年度繰越金等
合計	18,955,015	7,543,157	

前年度繰越額	￥6,405,015
本年度収入額	￥6,442,007
本年度支出額	￥7,543,157
次年度繰越額	￥5,303,865

財産目録

（2001年9月30日）　（単位：円）

［資産の部］	現金及び預金	現金	
		本部現金	410,924
		事務局現金	58,303
		合計	469,227
		普通預金	
		三井住友銀行／園田支店	132,478
		三井住友銀行／園田支店	3,899,335
		三井住友銀行／園田支店	198,652
		三井住友銀行／難波支店	410,423
		合計	4,640,888
	未収入金	高橋玲子 貸付返済滞り額	436,632
		赤岩 恵 貸付返済滞り額	87,118
		合計	523,750
		資産の部合計	5,633,865
［負債の部］	未払金	監査費(森会計)	120,000
	預り金	準硬式野球部への寄付金	210,000
		負債の部合計	330,000
［次期繰越金］			5,303,865

※未収入金欄の赤岩 恵様(貸付返済滞り額)は、
平成13年11月7日に返済完了致しております。

2002年度　英知大学同窓会　予算案

（2001年10月1日～2002年9月30日）　（単位：円）

2002年度　事業計画案

(1) 同窓会が大学にできる事、しなければならない事の策定
(2) 同窓会組織の充実
(3) 同窓会入会金未収分の徴収と、年会費・終身会費納入の依頼
(4) 同窓会「会報」の充実

2002年度は上記を目標に活動したいと考えます。
皆様の暖かいご支援を心よりお願い申し上げます。

［収入の部］

費用	金額	摘要
前年度繰越金	5,303,865	
同窓会会費	3,000,000	平成14年度新入生0名,同窓生1,233名(目標300名)
在校生入会金	3,020,000	1回生 0 名・2回生88名 3回生51名・4回生59名
年会費	900,000	年会費 ￥3,000×300名
終身会費	600,000	終身会費 ￥30,000×20名
受取利息	10,000	
合計	12,833,865	

［支出の部］

費用	予算	摘要
旅費交通費	150,000	関東支部交流 他
通信費	2,000,000	会報送料・電話代 他
監査費	120,000	会計監査
事務用品費	150,000	消耗品
支払手数料	30,000	振込手数料 他
会議費	500,000	役員会議費（年間約20回）
事務局維持費	1,000,000	アルバイト代 他
印刷費	2,500,000	会報年2回・名簿追補版・案内状委任状他
OBクラブ開催費	1,000,000	ホームカミングデー及び総会
助成金	500,000	実行委員会・クラブ・クラブOB会・クラス会
会費に関するシステム作成費	2,000,000	名簿調査
献花費及び記念品費	100,000	入学・卒業・献花代
配布金	350,000	関東支部・和歌山グループ運営費
雑費	100,000	写真代 他
予備費	2,333,865	次年度繰越金等
合計	12,833,865	

※会費振込のお願い・・・年会費3,000円、終身会費30,000円をお願いいたします。

ホームカミングデー報告

11月3日同窓会主催のホームカミングデーを開催。皆さんもご存知の事と思いますが、同窓会の予算は縮小する一方で十分な予算をとれない状況にあります。そこで、役員は手作りのおもてなしをして、少しでもアットホームな気分を味わっていただこうと工夫をいたしました。ケータリングのメニューを極力減らし、役員自ら模擬店を出す！事に致しました。ホームカミングデー当日、仕込み調理と、工夫を凝らし参加して頂く会員の皆様に喜んで頂こうと年代を超えた友情とチームワークで何とか成功に会を執り行うことが出来ました。そして、会員の皆さんの喜ぶ顔に幸せを感じながら役員はホスト役を完遂することが出来ましたことを、この紙面を借りご報告致します。

今回のホームカミングデーの目玉は、揚子江ラーメン・恒例のたこ焼きそして、パエリャ！瞬く間になくなる料理、懐かしい顔にいっぱいの微笑みで若返った会員の皆様の楽しそうな顔と顔。つかの間、学生時代に戻って元気を取り戻して頂いたものと感じました。一年に一度のホームカミングデーにぜひご参加下さい。英知のキャンパスと懐かしい仲間が心からお待ちしています。最後に、パエリャは最高の味との評判でした。下の写真は当日の風景の一部です。本年も11月にお会いしましょう。お楽しみに！

'80 イスパニア文学科卒　和田 隆

"お久しぶりでーす。"当日開かれた'76卒業の同窓生達